



Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士 (医学)
報告番号	甲第1922号
学位記番号	第1356号
氏名	高畠 聡
授与年月日	令和4年9月26日
学位論文の題名	Validation of the Tinnitus Acceptance Questionnaire: Japanese Version (耳鳴アクセプタンス尺度日本語版の検証) Audiology Research, 12: 66-76, 2022
論文審査担当者	主査: 岩崎 真一 副査: 松川 則之, 鈴木 貞夫

論文内容の要旨

【背景・目的】耳鳴とネガティブな情動反応が悪循環を形成すると、耳鳴の程度に関係なく深刻な苦痛を伴うことが知られている。耳鳴に伴う苦痛には、それらをそのままにしておくアクセプタンスが有効とされ、米国のガイドラインでアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) が推奨されている。耳鳴 ACT では、耳鳴特異的なアクセプタンスの促進が耳鳴に伴う苦痛を改善することがわかっており、その際のアクセプタンスの評価尺度として Tinnitus Acceptance Questionnaire (TAQ) がある。日本でも耳鳴 ACT が開始したが、TAQ 日本語版が存在しない。そのため、本研究は TAQ 日本語版を開発し、その信頼性・妥当性を検証することを目的とした。

【方法】多施設横断研究。本研究は各施設における倫理審査委員会の承認を得ており、対象者からは文書による同意を得た。TAQ 日本語版は翻訳ガイドラインの推奨に準拠したプロセスを経て完成した。選択基準は、耳鳴が 3 か月以上持続する外来および入院患者で 20 歳以上の日本語を母国語とする者とした。対象者は TAQ 日本語版、Acceptance and Action Questionnaire-II、Tinnitus Handicap Inventory、Hospital Anxiety and Depression Scale、Valuing Questionnaire (VQ) に回答した。再テストは 7~14 日後に実施した。構造的妥当性について、TAQ 原版の 2 因子構造を仮定して確認的因子分析を行い、モデル適合度が不良の場合は、探索的因子分析を行った。基準関連妥当性、構成概念妥当性については予想される仮説を単相関にて検定した。内的一貫性を Cronbach' s α 係数、再テスト信頼性は級内相関係数で評価した。全サンプルサイズは 120 例、再テストサンプルサイズは 50 例とした。

【結果】全回答者 144 例中、有効回答数が 125 例 (86.8%)、再テスト回答数は 78 例であった。TAQ 日本語版の確証的因子分析ではモデル適合度が低く、探索的因子分析を行うと、原版とは異なる順項目群と逆転項目群に分かれた 2 因子構造となり、高い因子間相関がみられた。基準関連妥当性、構成概念妥当性について、TAQ と VQ の下位尺度同士の相関を予想した仮説以外の 4 仮説が支持された。内的一貫性について、全得点において Cronbach' s α 係数は 0.88 と適切な範囲内であった。再テスト信頼性について、全得点における級内相関係数は 0.95 であり基準以上を満たしていた。

【考察】肯定的表現・否定的表現の質問が混在する評価尺度では、Method effects (基本次元とは関係のない反応バイアス) によって因子が分割されることがある。TAQ 日本語版は、文脈情報を重視するという日本語の特徴の影響を受けて Method effects が生じ、肯定的表現・否定的表現の項目に分かれた 2 因子構造となったと考えられた。このため、TAQ 日本語版では原版の下位尺度得点は評価に用いない方がよいと考えられた。基準関連妥当性、構成概念妥当性、信頼性が示され、TAQ 日本語版は耳鳴特異的なアクセプタンスの評価に有用であると考えられた。

【結論】TAQ 日本語版の妥当性・信頼性が示された。また、原版の下位尺度得点は評価に用いない方がよいと考えられた。

論文審査の結果の要旨

【背景・目的】耳鳴による苦痛が耳鳴とネガティブな情動反応が悪循環を形成すると、耳鳴の程度に関係なく深刻な苦痛を伴うことが知られている。耳鳴に伴う苦痛には、それらをそのままにしておくアクセプタンスが有効とされ、米国のガイドラインでアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) が高いエビデンスレベルで推奨されている。耳鳴特異的なアクセプタンスの評価尺度として Tinnitus Acceptance Questionnaire (TAQ) があり、TAQ 全得点が高いと耳鳴 ACT の効果が高いことがわかっている。我々は慢性耳鳴 ACT プログラムを開発しており、より効果的なプログラム作成のために TAQ が必要である。本研究は TAQ 日本語版を開発し、その信頼性・妥当性を検証することを目的とした。

【方法】多施設横断研究。本研究は各施設における倫理審査委員会の承認を得ており、対象者からは文書による同意を得た。TAQ 日本語版は翻訳ガイドラインの推奨に準拠したプロセスを経て完成した。選択基準は、耳鳴が3か月以上持続する外来および入院患者で20歳以上の日本語を母国語とする者とした。対象者は TAQ 日本語版、Acceptance and Action Questionnaire-II、Tinnitus Handicap Inventory、Hospital Anxiety and Depression Scale、Valuing Questionnaire (VQ) に回答した。再テストは7~14日後に実施した。構造的妥当性について、TAQ 原版の2因子構造を仮定して確認的因子分析を行い、モデル適合度が不良の場合は、探索的因子分析を行った。基準関連妥当性、構成概念妥当性については予想される仮説を単相関にて検定した。内的一貫性を Cronbach's α 係数、再テスト信頼性は級内相関係数で評価した。全サンプルサイズは120例、再テストサンプルサイズは50例とした。

【結果】全回答者144例中、有効回答数が125例(86.8%)、再テスト回答数は78例であった。TAQ 日本語版の確認的因子分析ではモデル適合度が低く、探索的因子分析を行うと、原版とは異なる順項目群と逆転項目群に分かれた2因子構造となり、高い因子間相関がみられた。基準関連妥当性、構成概念妥当性について、TAQ と VQ の下位尺度同士の相関を予想した仮説以外の4仮説が支持された。内的一貫性について、全得点において Cronbach's α 係数は0.88と適切な範囲内であった。再テスト信頼性について、全得点における級内相関係数は0.95であり基準以上を満たしていた。

【考察】肯定的表現・否定的表現の質問が混在する評価尺度では、Method effects (基本次元とは関係のない応答バイアス) によって因子が分割されることがある。TAQ 日本語版は、文脈情報を重視するという日本語の特徴の影響を受けて Method effects が生じ、肯定的表現・否定的表現の項目に分かれた2因子構造となったと考えられた。2因子間の相関は高く、「耳鳴のアクセプタンス」という同じ構成概念をみていると考えられた。

【結論】TAQ 日本語版の妥当性・信頼性が示され、下位尺度の得点は評価に用いず、全得点での評価が有用と考えられた。

【審査の内容】約15分間のプレゼンテーションの後に、主査の岩崎からは、信頼性の検討内容、妥当性の検証として得られた結果の解釈、本尺度の利用方法、研究上の担当部分など研究の方法論や結果の解釈に関しての8項目の質問を行った。また第一副査の松川教授からは、日本語版作成の妥当性の検証方法、計量心理学的な検討方法の本質、リコールバイアスの解決方法、今後の研究の展開など研究の方法や今後の発展性などを中心とした5項目の質問がなされた。第二副査の鈴木教授からは、計量心理学における信頼性・妥当性の意味、 α 係数の数値の示す意味、認知行動療法の具体的方法、研究でもっとも苦勞した点、精神現象を研究する難しさなど研究方法や研究の今後の在り方を中心とした6項目の質問がなされた。幾つかの質問には回答に窮することもあったが、概ね満足のいく回答が得られ、学位論文の主旨を十分理解していると判断した。

本研究は、今後、慢性の耳鳴に対する介入プログラムを開発する際の評価指標となる耳鳴特異的なアクセプタンスの評価尺度である Tinnitus Acceptance Questionnaire (TAQ) 日本語版の開発および信頼性・妥当性を検討した意義の高い研究である。以上をもって本論文の著者には、博士(医学)の称号を与えるに相応しいと判断した。

論文審査担当者 主査 岩崎真一 副査 松川則之 鈴木貞夫